

1年生向け、東洋史分野紹介(2017年9月作成)

東洋史分野の教育目標

東洋史分野では、おもにアジア地域の、あるいはアジア地域にかかわる歴史的事象について、従来の学術的な研究成果を駆使するとともに、多種多様な言語・材質からなる史料をみずから探し出して、科学的・実証的な観点から分析を加えることのできる人を育成することを目的としています。このプロセスを経て、現代社会を生きるうえで必須の情報分析・処理能力をかたちづられることが期待されます。

東洋史学を学ぶことは、第一義には、アジア地域の過去と現在を知ることです。しかし、学問的な訓練を受ける中で習得される技能は、過去だけではなく、いまそこにある現実を読み解くためにも使われるべきです。歴史学は単に過去の事実を明らかにするだけのものではありません。東洋史分野での経験を通じて、現実を冷静に見据え、賢く生きる術が身につけられることでしょう。

東洋史分野の射程

「東洋史」と聞くと、漢籍を紐解き、中国史の研究をしているものと思われるかもしれませんが(グーグル画像検索をするとそんな感じです)。たしかに、中国前近代史は東洋史学の中の重要な構成要素のひとつです。また、漢籍がカバーする範囲は中国史のそれなりの割合を占めます。しかし、近現代中国史を研究するのに、漢籍だけでは到底足りず、多種多様な形態、言語を用いて当事者が残した様々な記録や統計なども利用していかなければなりません。

むしろ日本の東洋史学は、国史(日本)・西洋史(ヨーロッパ・アメリカ)以外のほとんどの部分をカバーする、きわめて広範な射程と深みを持った学問分野です。決して「中国史の言い換え」ではありませんし、ましてや「前近代中国史の言い換え」などではありません。

東洋史学という学問領域のなかには、おおむね東アジア・北東アジア・中央アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの地理区分があり、それぞれの地域の歴史的展開についての研究が行われています。そして、その連環も決して忘れてはなりません。東洋史分野のホームページの写真は、ちっとも中国っぽさがないかもしれませんが、中華人民共和国福建省の古い港町泉州(『東方見聞録』ではザイトン Zaitonとして登場します)にある、イスラム教の礼拝堂(モスク)です。そこには1000年以上におよぶ中国史・漢籍だけではカバーしきれない交易・文化交流・社会の中の衝突と受容の歴史があります。背景の広さとながりを意識することが東洋史学の醍醐味でもあります。

東洋史分野のカリキュラム構成

東洋史分野には、必ずしもかっちりしたカリキュラム構成はありません。これは、東洋史分野がカバーするフィールドが広大かつ多様であることによります。研究を進めるうえで、念頭に置かれる地域・時代によって習得すべき知識・技能も極めて多様なものになります。ただし2年次、3年次にそれぞれ達成しておいてほしい段階というのがあります。

2年次では、基幹演習を通じて、専門的な辞書など工具書を利用しながら、外国語、日本語の史料

を読む基本的な作法を習得することが望めます。とにかくこまめに専門的な辞書を引くこと、自分の浅はかな知識や根拠のないイメージに頼らないことを意識できるようになることが目標です。

3年次では、発展演習を通じて専門書・学術論文などについての批判的な扱い方を習得します。専門的な研究の基盤となる一般的な知識を把握しつつ、専門書・学術論文の内容について、鵜呑みにすることなく、内容を吟味し、同時に、その業績をこれまでの研究のながれのなかに位置付けられるようになることが目標です。

4年次には、卒業論文を作成します。自分の関心と社会の状況、先行研究の到達点などを勘案しながら、テーマを選び、調査・分析を行い、論文をまとめます。自ら学術的な営みを体験することにより、具体的な歴史的事情への造詣を深めるのみならず、社会における様々な問題解決に学術的なリソースを用いることが出来るようになることを目的とします。

なお、本学人文学部の東洋史分野では、おおむね学生の希望に沿って、現代から古代まで幅広い研究テーマの設定が可能です。よく「××はできますか？」みたいな質問を受けますが、だいたい「(本人の努力次第で)できる」とお答えしています(ただし考古学は発掘調査に行かないとダメなので、ウチでは無理です)。とはいえ正確には、「始めるのは全然かまわないし、邪魔も絶対しないつもりだが、うまくいくかはやってみないとわからん」といったほうがいいかもしれません。なべて研究とはそういうものですから。

東洋史分野への進級を考える方へ

見学の機会

東洋史分野では、東洋史資料室(人文棟3階)見学を常時受け付けています。とはいえ、突然おいでいただいても正直困る(誰もいないかもしれない/卒業論文執筆・ゼミ報告準備などで修羅場かもしれない)ので、希望者は事前に教員(豊岡:連絡先は担当科目のシラバスなどで確認してください)にメールで、あるいは担当の授業前後などにご相談ください。

語学について

東洋史分野は、日本以外の地域について研究する分野なので、必然的にその地域の言語を利用する必要が出てきます。日本の中等教育まででは触れることのない言語、本学では初修外国語として開講されていない言語が多くあります。それぞれの言語の習得方法については、適宜指導を行います。これまでに勉強していなくても構いません。ただし、自分で勉強してもらいます。

東洋史分野に向いている方、向いていない方

東洋史分野では、1年次に特定の授業(東洋史概論など)の受講していることなどを受入れの条件とはしていません。また、上述の事情があるので、特定の語学(例えば中国語、ハンガルなど)についての学習経験も求めません。ただし、英語以外の外国語を勉強するつもりのない方、日本以外の地域に関心のない方はやめておいたほうがよいでしょう。べつに流暢に外国語を話せるようになることを望んでいるわけではありませんが、3年も在籍して自分が研究した地域の言語の辞書も引けないようでは話になりません。

なお、選んだテーマ・地域にかかわる言語は、自修が基本です。勉強する手がかりについては指導しますし、教員が逐次相談にのります。

東洋史分野は、基本的に、一人に一つの専門を設定することを求めます。自分の研究は自分でします。そのため、同じ分野でもだれかと一緒に同じ史料・文献を調査・分析することはあまりありません。共同作業にこそ喜びを覚えるようなタイプの方は止めておいた方がよいかもしれません(資料室の管理・運営などには協力していただないと困りますが)。

隣接分野との協同・差異

東洋史学は、ヨーロッパ・日本・南北アメリカ以外すべてをカバーする学問領域です。そのため、多くの学問分野と重なる部分があります。

例えば、日本史分野とは日中関係・日朝関係など日本の対外関係については、重なる部分があります。この場合、どちらに軸足を置いて考えたいのかが重要になります。外国と日本の両者の思惑や、外国からみた日本について考えるなら、東洋史分野のほうがよいし、日本の立場を考えるなら日本史分野のほうがよいかもしれません。

西洋史分野とも、たとえば、アフリカ、インドや東南アジアでの欧米諸国による植民地統治などをめぐって研究が重なります。東アジア・中央アジアなどでの西ヨーロッパの人々の活動なども重なる部分です。実際、東洋史学の研究者は、ヨーロッパの文書館にも頻繁に出かけます(自分のフィールドよりも、むしろ世界各地の情報が集まるたとえばロンドンの国立文書館のほうが同業者によく遭遇するのです)。ヨーロッパの中で完結することは西洋史分野のほうがよいでしょうが、グレーゾーンになりそうなところ(例えば、オスマン帝国やロシア帝国は伝統的にヨーロッパの国際関係に含まれていますがアジアっぽさが濃厚な政権です。西アジアは東洋史・西洋史どちらでも取り扱います)についてどちらで勉強するかは、好みの問題です。歴史学コースの各分野の必要習得単位は重複していますので、どの分野でも取る授業はあまり変わらないともいえます。周りで一緒に勉強する仲間とどのような話をしたいのかを考えながら選ぶと良いかもしれません。

中国語学・文学分野や哲学思想分野とも、中国という部分で重なる部分が大いにあります。東洋史分野は、社会経済史・政治史を中心とした学問分野です。人間ひとりひとりの考えよりも、社会構造や政治構造などへの関心が強い分野です。また、よその地域との連関を強く意識するものです。人々の暮らしなど社会状況などは、東洋史分野で扱われます。著作を残すような人物の思想は哲学思想分野(中国哲学)、文学作品の内容や言語学的な分析は中国語学・文学分野で扱われます。

卒業論文のテーマ

近年のテーマは以下の通りです。

「人民共和国成立期の中ソ関係」(2011年度)

「上海における西洋文化の受容と変容」(2013年度)

「中国の革命運動における資金調達」(2014年度)

「日韓の歴史認識をめぐって」(2015年度)

- 「満州国をめぐる国際関係」(2015 年度)
- 「現代インド社会と経済発展」(2015 年度)
- 「日中戦争期の通貨と金融」(2015 年度)
- 「明代江南における地域社会」(2016 年度)
- 「中国における近代国家の形成と女性」(2016 年度)
- 「現代中国の計画出産」(2016 年度)
- 「中国国民政府期の教育政策」(2016 年度)
- 「旧日本軍兵士の男性性」(2016 年度)
- 「戦後韓国の経済発展における農村社会」(2016 年度)

卒業後の進路

特別な仕事に就く例はあまりありません。近年は公務員が多く、一般企業(業種も様々)が続きます。教職免許(社会・地理歴史・公民)を取得する学生はそれなりにいますが、そのまま教員になった例は多くありません。

大学院進学を希望する学生ももちろん受け付けますが、相応の指導をします(キツイのか、ユルイのかは受け手の感覚次第)。適宜ご相談ください。